

菊川市埋蔵文化財調査報告書 第22集

下田遺跡第7次発掘調査報告書

(六郷地区センター建設に伴う発掘調査)

2020

菊川市教育委員会

下田遺跡第7次発掘調査報告書

(六郷地区センター建設に伴う発掘調査)

2020

菊川市教育委員会

例 言

1 本書は、静岡県菊川市本所字下田 2406、2409 において実施した下田遺跡の発掘調査の報告書である。

2 調査は、菊川市の六郷地区センター建設に伴い、菊川市教育委員会が実施した。

3 調査は菊川市教育委員会の以下の体制で行った。

平成 29 年度～令和元年度

教 育 長

石 原 深 (～平成 30 年 1 月)

教育文化部長

松 本 嘉 男 (平成 30 年 2 月～)

加 藤 容 章 (～平成 30 年度)

社会教育課長

大 野 慶 明 (令和元年度)

文化振興係長

清 水 久 安

文化振興係指導主事

齋 藤 政 巳

田 村 隆太郎 (調査担当者：～平成 30 年度)

文化振興係主査

丸 杉 俊一郎 (調査担当者：令和元年度)

松 下 徳 男 (調査担当者)

現地調査 (平成 29 年度) 期間：平成 30 年 (2018) 1 月 29 日～3 月 20 日

参加者 石間 豊成、菅沼 敏江、竹内 正明、富田 克廣、松下 一男、間瀬 雄三、
水島 まさ江、三ツ井 しの、三邊 有希、渡邊 四郎

整理作業 (平成 30 年度、令和元年度)

参加者 タマン谷 純子、大川 友子、松永 綾、熊切 奈津子、高塚 亜希子、
三邊 有希

4 現地調査における基準点測量と出土遺物の実測・トレース・観察表作成については、株式会社フジヤマが実施したものである。

5 本書の執筆は、第 3 章 3 を丸杉、その他を田村が行なった。編集は丸杉が担当した。この執筆にあたっては、静岡県文化・観光部文化局文化財課の御支援をいただいた。

6 調査の実施にあたって、六郷地区の自治会の皆様には多大な御協力をいただいた。また、平安時代以降の土器について溝口彰啓氏に御教示をいただいた。

7 調査の記録 (実測図・写真) および出土遺物は、すべて菊川市教育委員会が保管している。

目次

第1章 調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境と調査歴	3
第3章 調査の成果	
1 概要	6
2 遺構	7
3 遺物	13
第4章 まとめ	22
写真図版	
抄録	

挿図・表・写真目次

第1図 遺跡の位置	2	第9図 土坑・小穴	12
第2図 周辺の遺跡分布	4	第10図 出土遺物1	14
第3図 周辺地形と調査区配置	5	第11図 出土遺物2	15
第4図 調査区全体図	6	第12図 出土遺物3	16
第5図 検出遺構	8	第13図 出土遺物4	17
第6図 窪地遺構の遺物出土状況	9	第14図 出土遺物5	18
第7図 竪穴状遺構	10	第15図 出土遺物6	19
第8図 溝状遺構	11		
第1表 出土遺物観察表	20	写真1 地元小学生の発掘体験	1

図版目次

図版1	1 1区全景(南から)	4 SX03 遺物出土状況(西から)
	2 2区全景(南東から)	5 SX10(南東から)
図版2	1 3区全景(東から)	5 SD02(南西から)
	2 1区調査終了状況(南から)	図版5 1 SD01(北東から)
	3 1区西壁 SX15 北部土層断面(東から)	2 SD07、SD12、SD08(南東から)
図版3	1 SX15 上層遺物出土状況(南から)	3 SD09(南東から)
	2 SX15 遺物(37)出土状況(北西から)	4 SD16(東から)
	3 SX15 下層遺物出土状況(南東から)	5 SK04(北西から)
図版4	1 SX15 下層遺物(27)出土状況(南西から)	6 SK14(東から)
	2 SX15 下層遺物(18・37)出土状況(南東から)	7 SK13(北西から)
	3 SX03(北西から)	8 SP11a・b(南から)
		図版6 出土遺物1
		図版7 出土遺物2
		図版8 出土遺物3

第1章 調査の概要

1 調査に至る経緯

静岡県菊川市本所字下田において、菊川市による六郷地区センターの建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下田遺跡の範囲内にあったため、菊川市教育委員会は平成29年10月24日に確認調査を実施した。その結果、遺構・遺物が存在する範囲を確認することができた。

菊川市（地域支援課）は、平成29年12月22日付けで六郷地区センター建設工事に係る埋蔵文化財発掘の通知を提出した。それに対して、平成30年1月11日付けで静岡県教育委員会教育長から取り扱いに関する通知があり、建物、調整池、敷地外周の擁壁の建設によって遺構・遺物への影響があると判断される範囲について、本発掘調査の必要が示された。本発掘調査は、菊川市教育委員会が実施することとした。

- 平成29年12月25日 菊教社第447号-1 土木工事等に係る埋蔵文化財発掘の通知（進達）
- 平成30年3月26日 菊教社第592号 下田遺跡第7次発掘調査結果概要
- 平成30年3月26日 菊教社第593号 埋蔵物の保管証
- 平成30年3月26日 菊教社第594号 埋蔵物の発見届

2 調査の方法と経過

平成30年1月29日に発掘を開始した。調整池による調査区を1区、建物による調査区を2区、擁壁による調査区を3区として設定し、31日までに全調査区の表上等除去を重機により行った。その後、基準点測量を行うとともに、各調査区の包含層削削、遺構検出、遺構掘削を人力で行った。2月9日には3区、3月2日には2区の発掘作業と写真撮影・測量等の記録作業を終えた。1区は、3月7日までに古墳時代後期の窪地遺構を残した状態（第1面：平安～鎌倉時代）の発掘作業と記録作業を行い、その後、3月14日までに窪地遺構を完掘し、記録作業も行った。3月20日までに全調査区を埋め戻し、全ての発掘作業を終了した。

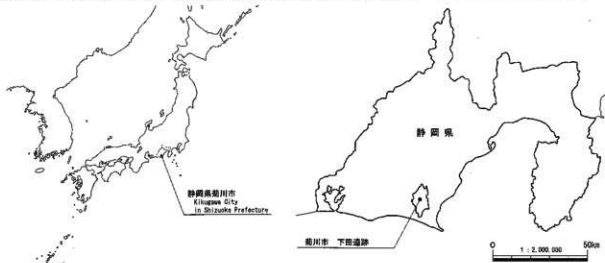
2月16日には、北隣にある六郷小学校の6年生に発掘調査現場の見学と発掘体験をしていただいた。また、3月11日には現地説明会を開催し、地域住民を中心とした25名の参加者に発掘中の遺跡の状況と出土品をご覧いただいた。

基準点測量は株式会社フジヤマが実施した。実測は縮尺20分の1（詳細図10分の1）で行った。写真は35mm判白黒と35mm判カラーリバーサルを用い、一部は中判のカラーリバーサル、補助としてデジタルカメラを利用した。

資料調査は、平成30年度から令和元年度のなかで遺物・遺構記録の作業を進めて報告書を作成した。出土品の実測・トレース・観察表作成は株式会社フジヤマが実施した。



写真1 地元小学生の発掘体験



第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境 (第1図)

菊川市域は、東の牧之原台地と西の小笠山丘陵および北の火剣山を最高点とする丘陵地に囲まれ、中央に菊川が太平洋へと南流する。この菊川を中心に平野が形成されているとともに、東西には枝葉のように分かれる支流によって多くの谷平野がのびている。下田遺跡は、菊川平野の北寄りで北東方向にのびる小出川の流域に存在する。

小出川は比較的小さな川であり、その谷平野は幅0.2km程度である。また、小出川は西隣りの菊川と並行した流れになっており、両者の間の丘陵は東西幅0.5km以下と狭い。下田遺跡は、この丘陵の中央付近で東西幅が狭くなった部分にあたり、丘陵上から東の谷平野までを範囲とする。この部分の丘陵の東西幅は約0.15kmである。また、現在の小出川は人工的に整備された流れではあるが、下田遺跡の範囲はその小出川(谷平野東寄り)を東縁としている。

2 歴史的環境と調査歴 (第2図)

下田遺跡では、過去に第1～6次の発掘調査が行われている。谷平野においては、古墳時代から中世までの溝状遺構や小穴等と遺物が発見されている。各時代において、西側丘陵を背にした微高地に集落が営まれたことが判明している。丘陵地においては、木棺直葬の古墳や中近世の塚の存在が指摘されているほか、南斜面に横穴墓1基が発見されている。また、北隣りの四ツ枝遺跡の丘陵地では、埋蔵銭が発見されている。室町時代(15世紀)の壺に4,133枚の銅銭が納められていた。

小出川の東側の丘陵地では、横穴墓の分布が認められる。これらは発掘調査歴がなく詳細不明であるが、菊川流域では古墳時代後期前半に横穴墓が出現し、後期後半から終末期に多くの横穴群が形成されることがわかっている。集落跡については、小出川流域では大きな展開は認められてなく、南の菊川との合流地点付近において注目される遺跡が分布している。御領所遺跡では、古墳時代や平安時代以降の集落跡が把握されている。宮ノ西遺跡では、弥生時代中期や古墳時代前・中期、奈良時代から中世までの集落跡が調査されている。奈良時代の建物群については、郡衙と関係する可能性も指摘されている。

【参考文献】

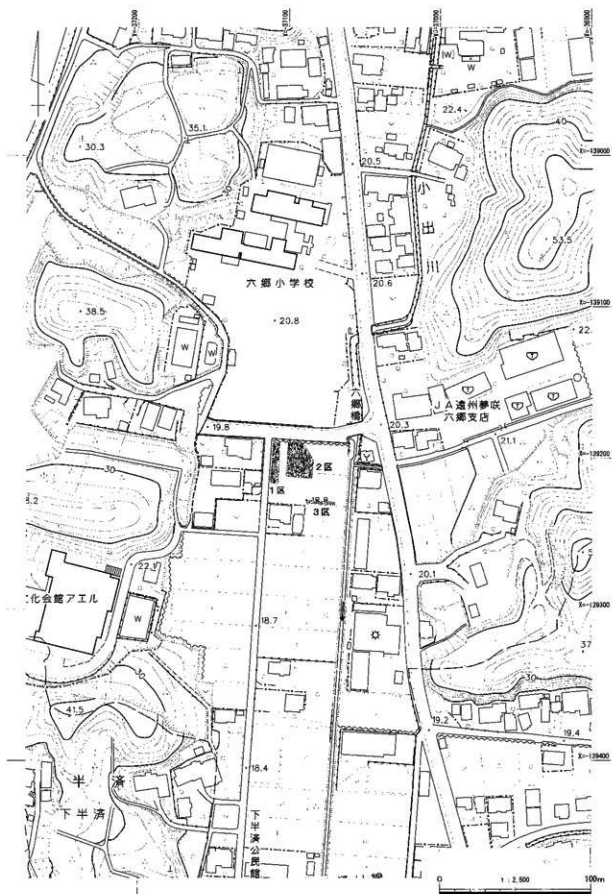
- 菊川市教育委員会 2016 『宮ノ西遺跡発掘調査報告書 第4次調査』
- 菊川町教育委員会 2000 『御領所遺跡』
- 菊川町教育委員会 1990 『四ツ枝遺跡』
- 菊川町教育委員会 1994 『文化財年報-第1号』
- 菊川町教育委員会 1997 『文化財年報-第4号』
- 菊川町教育委員会 2002 『宮ノ西遺跡』
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『御領所遺跡』



- | | | | | | |
|------------|-------|-------------|--------|------------|-------|
| 47 鳥塚遺跡 | (竪塚) | 101 深川横穴群 | (横穴) | 125 原山遺跡 | (散布地) |
| 48 権立衛門遺跡 | (散布地) | 102 一ノ坪遺跡 | (生土遺跡) | 126 跡九郎遺跡 | (散布地) |
| 66 八幡遺跡 | (散布地) | 103 小出横穴群 | (横穴) | 127 月岡Ⅱ遺跡 | (散布地) |
| 67 八幡古墳 | (古墳) | 104 藤谷古墳群 | (古墳) | 186 大平遺跡 | (散布地) |
| 68 鹿島・打上遺跡 | (散布地) | 105 藤谷横穴群 | (横穴) | 200 西福寺西遺跡 | (集落跡) |
| 71 鹿島古墳 | (古墳) | 106 藤原所遺跡 | (集落跡) | 204 若宮遺跡 | (散布地) |
| 83 白岩遺跡 | (集落跡) | 107 加茂神社遺跡 | (散布地) | 205 宮ノ西遺跡 | (散布地) |
| 84 鳥遺跡 | (散布地) | 108 小川端遺跡 | (集落跡) | 206 宇藤横穴北群 | (横穴) |
| 85 下本所A横穴群 | (横穴) | 109 白岩下遺跡 | (散布地) | 207 宇藤横穴南群 | (横穴) |
| 86 下本所B横穴群 | (横穴) | 110 白岩東狭間遺跡 | (散布地) | 216 山本遺跡 | (散布地) |
| 93 古田横穴群 | (横穴) | 111 白岩西狭間遺跡 | (散布地) | 218 長池橋遺跡 | (散布地) |
| 94 新井遺跡 | (散布地) | 114 西袋遺跡 | (散布地) | 221 林光寺遺跡 | (集落跡) |
| 95 西ノ谷遺跡 | (集落跡) | 118 長池北遺跡 | (散布地) | 224 末山遺跡遺跡 | (散布地) |
| 96 下田遺跡 | (集落跡) | 119 長池遺跡 | (集落跡) | 226 宇藤遺跡群 | (集落跡) |
| 97 下田横穴群 | (横穴) | 120 長池横穴群 | (横穴) | 227 方味遺跡 | (散布地) |
| 98 小出遺跡 | (散布地) | 123 長池古墳群 | (古墳) | 231 長池Ⅱ遺跡 | (散布地) |
| 99 上ノ屋敷城跡 | (城跡) | 124 長池南遺跡 | (散布地) | 234 白坂横穴群 | (横穴) |
| 100 榎下遺跡 | (散布地) | | | | |

※数字は地誌文化財調査地域の番号を示す

第2図 周辺の遺跡分布



第3図 周辺地形と調査区配置

第3章 調査の成果

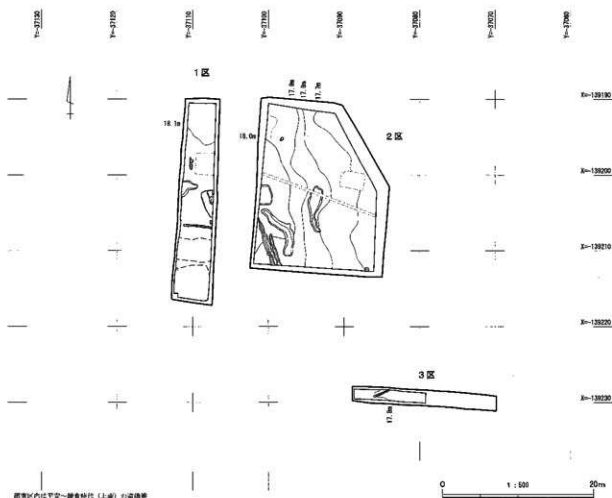
1 概要

(1) 地形と土層 (第3・5図)

地形 西寄りの1区から2区西縁では、現地表(水田)面から深さ0.5m弱において、平坦な地形が検出された。そこから2区の東に向かっては、緩やかに下がる斜面が検出された。3区では、現地表(水田)面から深さ約0.7mにおいて、わずかに東へ下がる低地面が検出された。

以上のように、西寄りには微高地上の平坦面があり、そこから東には緩やかに下がる地形が検出された。周辺の現況地形をみると調査地点の西側には微高地状の地形が続いていたと推測できる。また、東側には小出川が流れている。この遺跡は西の丘陵と東の川に挟まれた地形に営まれた遺跡であり、今回の調査地点はその川寄りにあたるものと指摘できる。

土層 基本土層は、水田耕作土の下に褐色シルト質土があり、この層が斜面下方では厚くなる。その下に平安～鎌倉時代の遺物を包含する厚さ0.1～0.2m前後の黒褐色シルト質土があり、この遺物包含層を掘削すると白灰色粘質土などが現れ、その上面を遺構検出面とした。



第4図 調査区全体図

(2) 遺構と遺物

遺構 今回の調査で検出した遺構は下記のとおりである。なお、遺構名称は、種別を示すアルファベットに通し番号の数字を付している。現地で付した遺構名称のうち、3区SD01はSD16に変更し、SD05・SI06はSX15の上層として報告することとした。また、SK11はSP11aとSP11b、SI03はSX03、SI10はSX10、SX14はSK14に変更した。

古墳時代の遺構

窪地遺構 SX15

平安～鎌倉時代の遺構

竪穴状遺構 SX03・SX10

溝状遺構 SD01・SD02・SD07・SD08・SD09・SD12・SD16

土坑 SK04・SK13・SK14

小穴 SP11a・SP11b

遺物 出土遺物には、古墳時代後期の須恵器と土師器、平安～鎌倉時代の陶器（灰釉陶器・山茶碗）がある。前者の多くは窪地遺構からの出土であり、後者には遺物包含層からの出土と遺構からの出土がある。

2 遺構

(1) 古墳時代の遺構

窪地遺構：SX15（第5・6図） 1区において、その中央北寄りから南側全体に検出された落ち込みである。遺構の規模や形状は、調査区外になる部分が多く不明である。しかし、検出した北縁部は北西から南東に向かって弧状を描いており、遺構範囲が2区には及んでいないことから、1区から南西側に広がるものと把握できる。

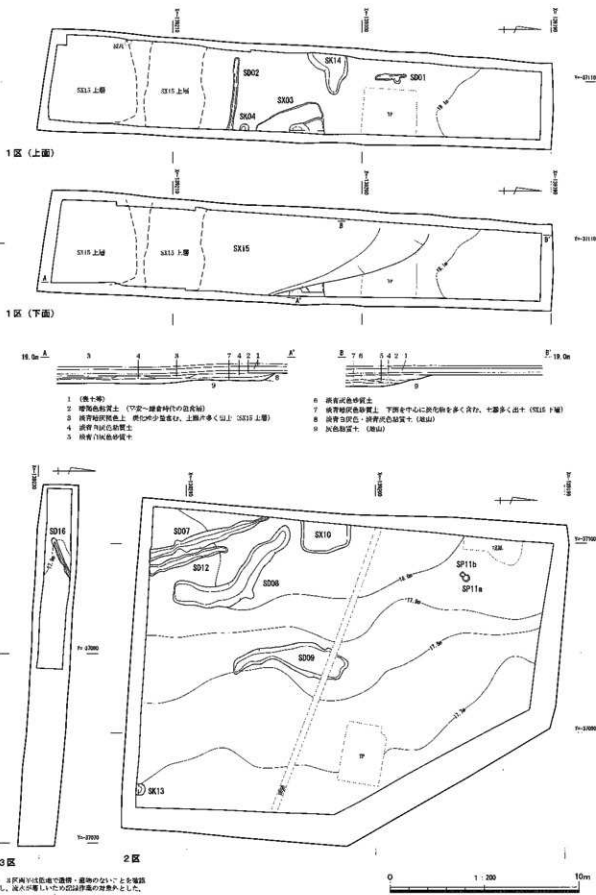
検出範囲は東西約4m（1区の幅）、南北約20m、深さは約0.6mである。覆土は、1区南部の最上層に淡青暗灰褐色土が分布し（「上層」）、その下は遺構全体に淡青白灰色粘質土や淡青灰色砂質土が認められ、最下層には炭化物を含む淡青暗灰色砂質土が堆積していた（「下層」）。なお、土層断面からは、下層の埋没にも遺構形状を変える諸段階があったと推測することができる。

上層からは小片化した土器が多く出土し、下層からは残りの良い土器の出土が認められた。ただし、完形の土器はなかった。須恵器（第10図1～3・5・6）は少なく、土師器（第11～14図8～37）が多い。古墳時代後期後半のもので占められており、層位による時期差は評価し難い。

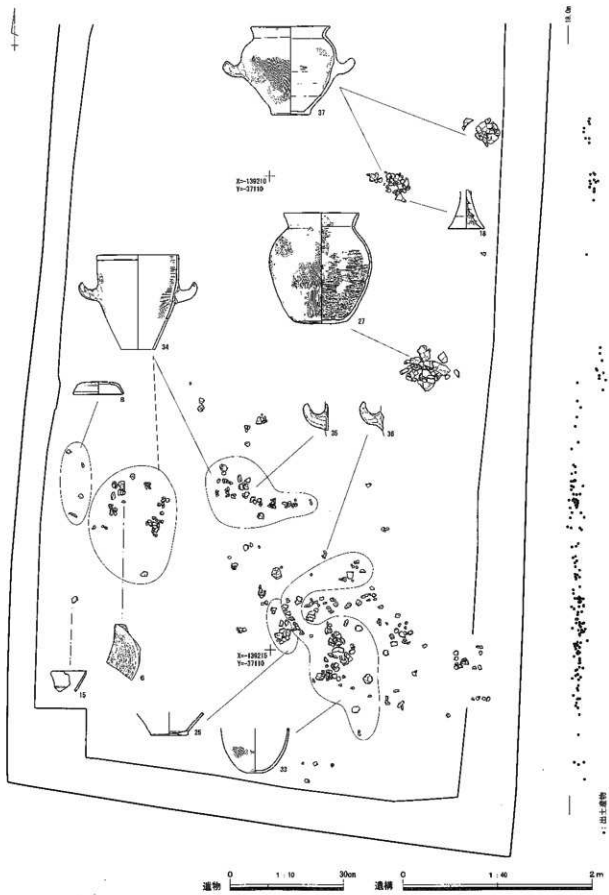
(2) 平安～鎌倉時代の遺構

竪穴状遺構：SX03・10（第7図） SX03は、1区中央部の東寄りに位置する。平面形は南北約3.6mの方形に把握することができるが、東半部は調査区外にあるため不明である。深さは約0.05mであり、底面は概ね平坦であるが、東寄りに深くなる部分を伴う。柱穴や竈は検出できず、住居跡であるかは不明である。覆土は暗灰色砂質土を基調とする。灰釉陶器の碗（第15図38・43）などが出土しており、平安時代後期（11世紀後半頃）の遺構である可能性が高いと判断できる。

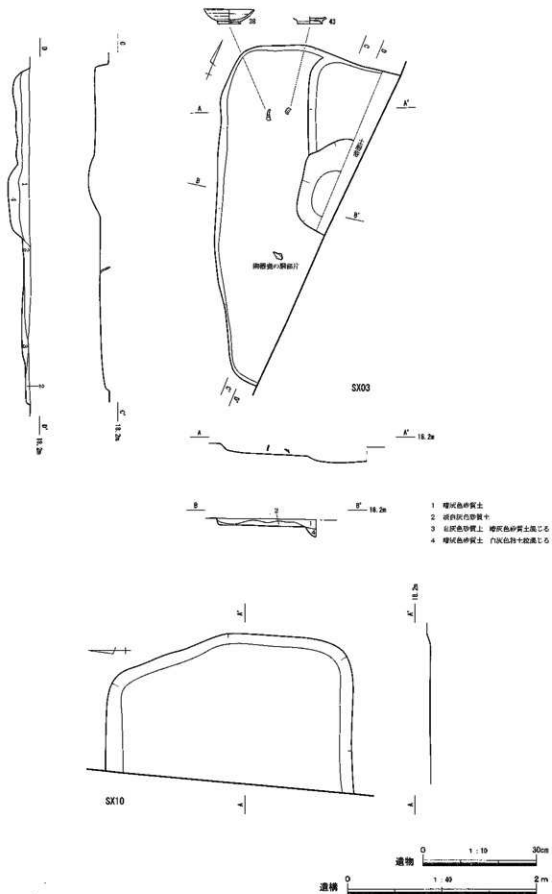
SX10は、2区西縁部の中央付近に位置する。平面形は南北約2.6mの方形に把握することができるが、西部は調査区外にあるため不明である。深さは約0.03mであり、底面は概ね平坦である。柱穴や竈は検出できず、住居跡であるかは不明である。覆土は暗灰褐色土である。出土遺物はないが、覆土から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が指摘できる。



第5図 検出遺構



第6図 窪地遺構の遺物出土状況



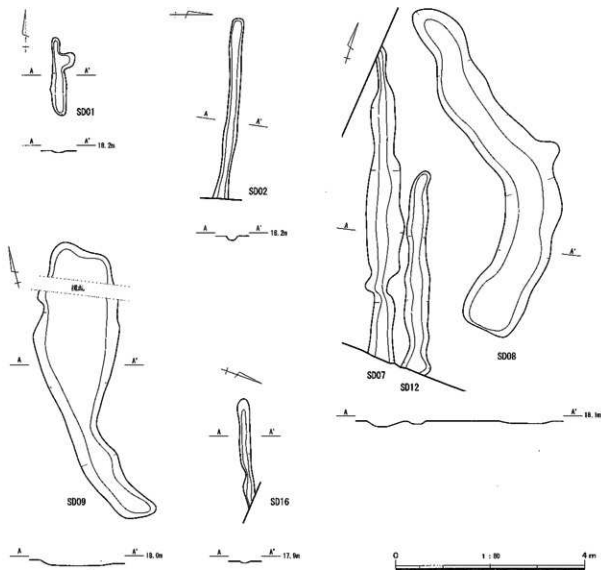
第7図 竖穴状遺構

溝状遺構：SD01・02・07・08・09・12・16（第8図） SD01とSD02は、1区において直線的にのびる溝状遺構である。SD01は南北方向、SD02は東西方向にのびており、両者は直交方向になる。幅は約0.3mと比較的狭く、深さは約0.05mである。覆土は暗褐色土である。出土遺物はSD01出土の陶器片1点のみであるが、検出面や覆土から、平安～鎌倉時代の遺構である可能性が高いと判断できる。

SD07とSD12は、2区南西部において直線的にのびる溝である。両者は北北西から南南東へと並行しており、北北西側が浅くなって途切れる点も共通する。SD07は幅約0.8m、深さ約0.1m、SD12は幅約0.5m、深さ約0.05mである。覆土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物はSD07出土の陶器片のみであるが、覆土から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が指摘できる。

SD16は、3区の直線的な溝状遺構である。幅0.2m強、深さ約0.03mであり、SD07・12と直交方向にのびる。出土遺物はない。覆土は暗灰褐色土であり、平安～鎌倉時代の可能性が指摘できる。

SD08とSD09は、2区に位置する不定形な溝状遺構である。幅は大きく変動し、曲がりながらのびる。深さは約0.1mであり、覆土は暗灰褐色土を基調とする。出土遺物はSD09出土の陶器片のみであるが、覆土から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が指摘できる。



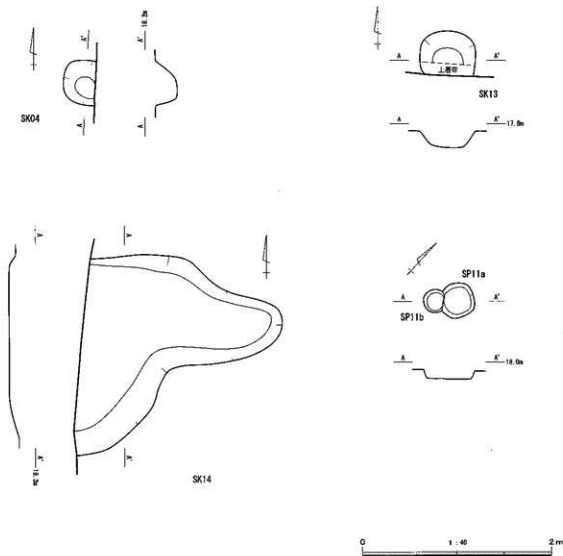
第8図 溝状遺構

土坑：SK04・13・14（第9図） SK04は、1区中央部の東縁に位置する。南北約0.5mの平面不整形円形を呈し、深さは0.2m強である。覆土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物はないが、検出面と覆土から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が高いと判断できる。

SK13は、2区南東部の南縁に位置する。東西0.6m弱の平面円形を呈し、深さは約0.2mである。覆土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物はない。覆土から平安～鎌倉時代の可能性が指摘できる。

SK14は、1区中央部の西寄りに位置する。平面不整形で深さは0.1m以下と浅いことから、人為的に設けられたものではない可能性がある。出土遺物は小破片の土器のみであるが、検出面から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が指摘できる。

小穴：SP11a・b（第9図） SP11a・bは、2区北部の斜面地に位置する。径約0.4m、深さ約0.1mのSP11aと径0.2m強、深さ約0.1mのSP11bの2基が接する状態で検出されたが、切り合いによる先後関係は把握できなかつた。覆土は白色粘土粒を含む黒褐色土である。出土遺物はないが、覆土から平安～鎌倉時代の遺構である可能性が指摘できる。一方、遺構の立地や分布状況から、建物跡などの柱穴である可能性は評価できない。



第9図 土坑・小穴

3 遺物

(1) 古墳時代の遺物(第10~14図)

須恵器 1~6が須恵器であり、ほとんどがI区のSX15より出土している。1は坏蓋であり、天井部と口縁部の境界をなす稜線は不明瞭である。口縁部は丸く仕上げられている。天井部のケズリ調整の範囲は狭い。2・3は坏身である。口縁部の立ち上がりは短く内傾しており、口縁端部は丸く仕上げている。底部のケズリ調整の範囲は狭く、底径の小型化が顕著である。これらの諸特徴から、1~3の坏蓋・坏身は遠江須恵器編年Ⅲ期後葉頃(鈴木2004)と位置付けられるであろう。

4は甕の口縁部、5は内外面にタキヤ痕が明瞭に残るため、甕の底部付近であろう。6は提瓶であり、外面にカキメ調整がみられる。

これらからSX15を中心とした須恵器の年代観は、6世紀末葉頃と捉えておきたい。

土師器 8~37が土師器であり、すべて1区のSX15から出土したものを図示している。8は平坦な天井部から屈曲して口縁部にいたる形態的特徴から、須恵器の坏蓋を模倣した蓋と推測される。9・10は模倣坏である。9はやや長い口縁部が強く内傾するのに比べ、10は口縁部が短く立ち上がるため内傾は非常に弱い。10は扁平な底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ坏である。形態的特徴からは古代の坏身類と共通しているため、混入した可能性も推測できる。11は口縁部が内湾しながら立ち上がる坏である。

12・13は小型の鉢類と考えられるが口縁部に差異が認められ、12はやや直立し13はやや外傾している。

14~20は高坏である。14・15は高坏坏部であり、14の小型の坏部内面にはハケ調整が明瞭にみられる。15の坏部外面には稜が認められる。16~19は高坏脚部である。裾部の開きは弱いものの長脚化が進行しており、特に18・19で顕著に認めることができるであろう。いずれも脚部内面は製作段階の螺旋状の輪積み痕跡が明瞭に観察できる。20は外に大きく開く脚部から、鉢形の坏部をもつ高坏と考えられる。

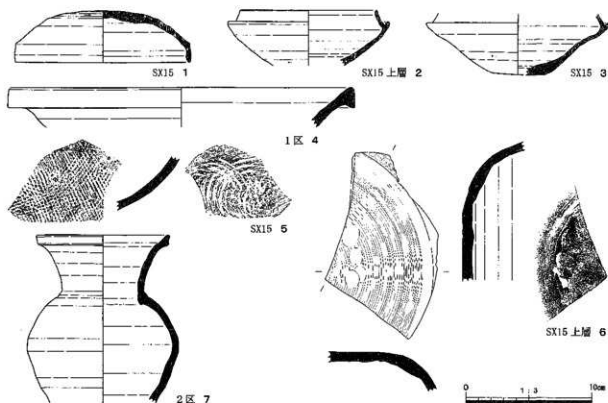
21・22は小型壺の口縁部である。21は直線的にやや外側へ開くが、22はやや直立気味な口縁端部を有している。23は小型長頸壺の体部であろう。

24は鉢の口縁部であり、口縁端部がやや肥厚する。25・26は鉢などの底部である。平底の底部には木葉痕が遺存している。27~33は甕である。27は口縁部が外に開き体部がやや球形を呈している。底部は平底であり、ハケ調整が明瞭に残る。28の口縁部は弱く外反しており、やや長胴化がみられる。底部は平底であり、木葉痕が認められる。29は口縁部が大きく外反しており、長胴化が顕著である。30~32は中型の甕になると推定され、その口縁部には多くの形態がみられる。33は完全な平底とはならず、やや丸底気味である。

34~36は瓶である。34は口縁端部を折り返していることから、複合口縁部となる瓶と確認できる。体部外面中位には把手を付しており、体部内面には粗いハケ調整が明瞭に観察できる。35・36は瓶の把手部分である。

37は把手付鉢である。口径に比べて器高が低いのが特徴である。底部は平底であるが底径が小さく、口径よりも半分近く小さいので非常に不安定な形態である。口縁部は緩やかに外反しており、体部は肩が張る形態である。口縁部の形態は甕と共通するものと判断できる。胴部中位に把手をもつが、瓶の把手に比べて幅広で先は尖らない。

以上の特徴からSX15から出土した土師器は、須恵器で得られた年代観を主体としたものと判断できる。しかし、土師器には古い要素が残るものもみられ、窪地遺構としての性格を反映して埴原時期の時間幅もやや長くなるものと推察できる。



第10図 出土遺物1

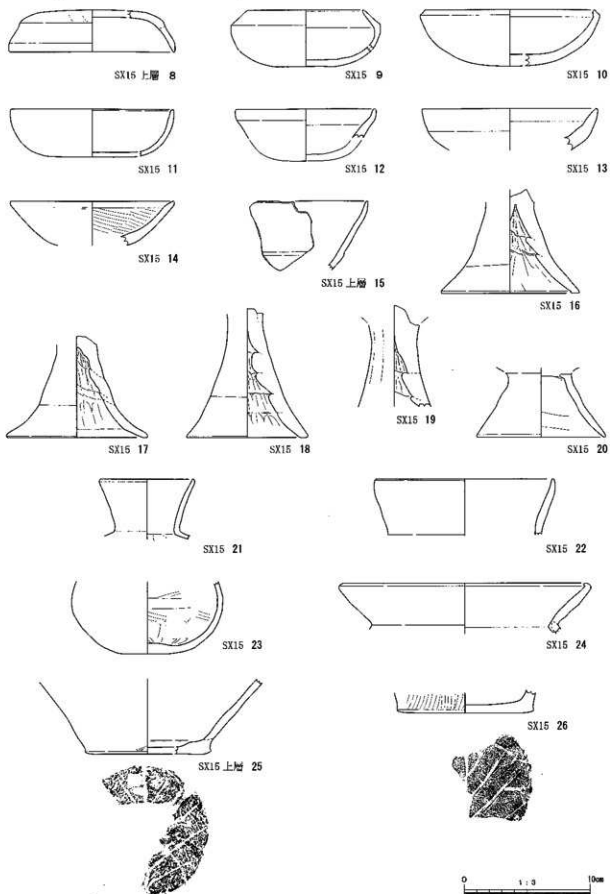
(2) 平安～鎌倉時代の遺物 (第10・15図)

須臾器 7は卵形の体部にやや外反する頸部をもつ小型の壺である。形態的特徴からは9世紀中葉頃に帰属するものと捉えられる。

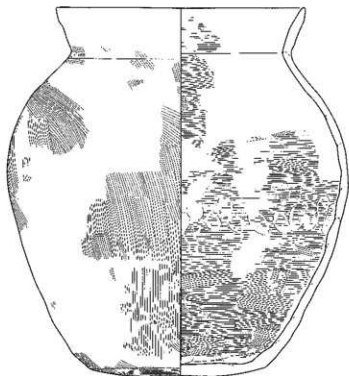
陶器 38～45は灰釉陶器である。38は1区SX03から出土した碗である。39は2区から出土した碗であり、内外面ともに灰釉がわずかに残る。東遠系の灰釉陶器であり、11世紀後半頃と推測される。40は3区で出土した碗であり、高台がやや方形を呈している。41の碗は2区から出土しており、やや深い碗形となる。内外面ともに灰釉がみられる。東遠系の灰釉陶器であり、11世紀後半頃と考えられる。42は2区から出土している。底部の特徴から小碗になると考えられる。東遠系の11世紀後半頃の灰釉陶器と考えられ、底部内面には重ね焼痕がみられる。43はSX03から出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。底部内面には重ね焼痕がみられる。44は1区より、45は2区より出土した東遠系の灰釉陶器の碗である。11世紀後半頃とみられる。

46～50は山茶碗である。2区から出土した山茶碗を図示した。46～49は東遠系の山茶碗の碗であり、12世紀後半頃と考えられる。46・48の底部外面には、糸切り痕が認められる。47の底部内面には重ね焼痕が、高台端部には粗敷痕がみられる。

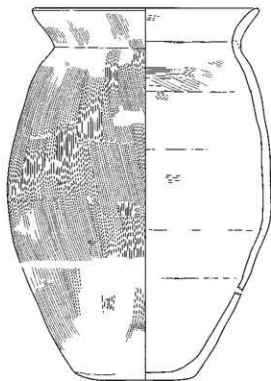
50は山茶碗の手持小皿である。小皿部分に小型品の小碗を載せた形態である。遺存状況から底部内面には小型品が2個体存在したものと推測される。小皿底部には糸切り痕が明瞭に残る。菊川市内の皿山古窯跡群では子持器台が多数出土しており、湖西古窯跡群でも子持器台がみられる。消費地においては、浜松市内の佐鳴湖西岸の坊々跡遺跡などで子持器台が確認されている。一方、大井川東岸の島田市・上反方遺跡では子持小皿が出土していることは注視できよう。子持器台と子持小皿の時期差や分布状況は、今後詳細な検証が必要となるであろう。製作時期を明確に示すことは難しいが、12世紀前半頃に所産と推定できるであろう。



第11圖 出土遺物2



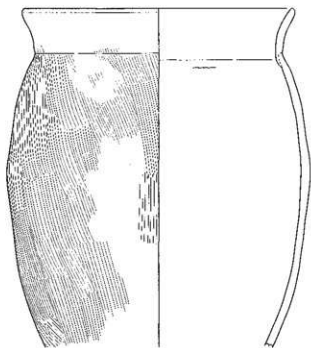
SX15 27



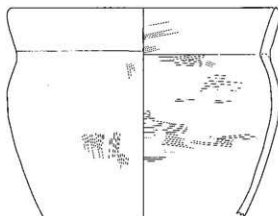
SX15 28



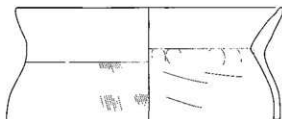
第12図 出土遺物3



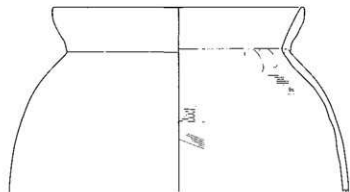
SX15 29



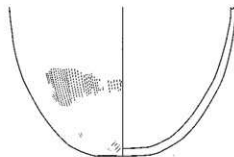
SX15 30



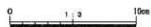
SX15 32



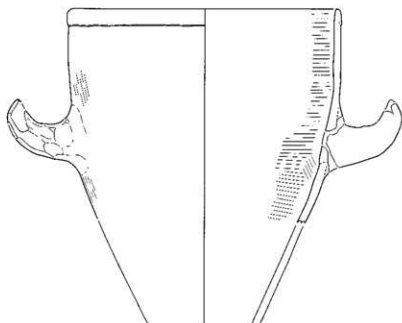
SX15 31



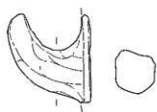
SX15 上層 33



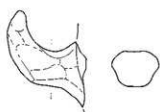
第 13 圖 出土遺物 4



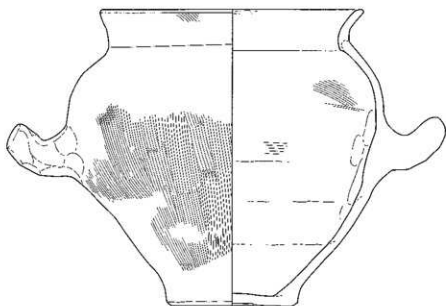
SX15 上層 34



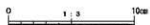
SX15 上層 35



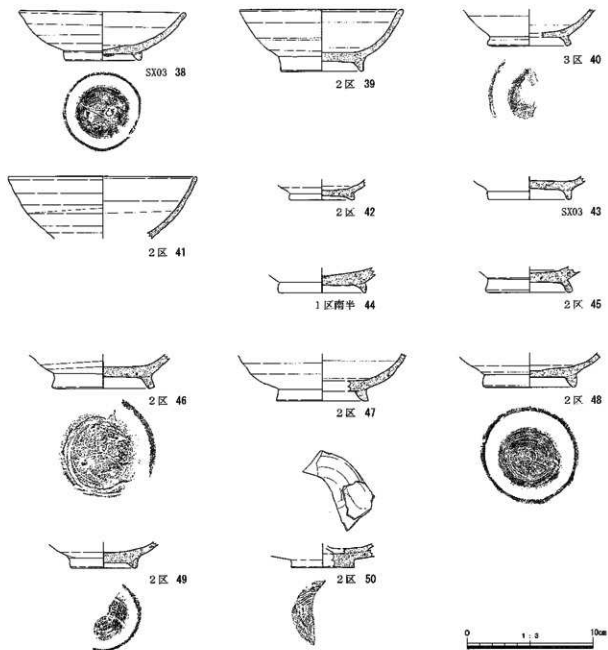
SX15 上層 36



SX15 37



第 14 圖 出土遺物 6



第15図 出土遺物6

第1表 出土遺物観察表

調査 区分	番号	調査 区	出土位置	種類	器種	計測値 (cm)				色調	残存 (%)	備考	
						口径	高さ	最大径	底径				
6	1	1区	SK15	須恵器	作蓋	13.9	4.2			灰白	40		
6	2	1区	SK15上層	須恵器	作身	10.8	(4.4)	12.8		灰	5		
6	3	1区	SK15	須恵器	作身		(4.9)	14.6	4.1	灰	50		
6	4	1区		須恵器	蓋	16.9	(3.2)			灰	5		
6	5	1区	SK15	須恵器	蓋		(4.3)			灰白	5		
6	6	1区	SK15上層	須恵器	椀椀		(14.0)			灰	30		
6	7	2区		須恵器	蓋	10.3	(13.3)	6.5	12.0	黄灰	20		
6	8	1区	SK15上層	土師器	段段蓋	13.0	(3.3)			灰	20		
6	9	1区	SK15	土師器	段段坪	9.2	(4.5)	11.8	4.8	にぶい黄	70		
6	10	1区	SK15	土師器	段段坪	13.4	(4.5)	14.2		にぶい黄	20		
6	11	1区	SK15	土師器	作坪	12.8	(3.7)			黄黄	10		
6	12	1区	SK15	土師器	鉢	10.9	(2.5)			にぶい黄	5		
6	13	1区	SK15	土師器	鉢	13.8	(3.3)			にぶい黄	5		
6	14	1区	SK15	土師器	高杯	12.9	(3.5)			黄黄	20		
6	15	1区	SK15上層	土師器	高杯		(3.5)			にぶい黄	5		
6	16	1区	SK15	土師器	高杯		(8.2)	10.9		黄黄	50		
6	17	1区	SK15	土師器	高杯		(8.1)	10.6		にぶい黄	40		
6	18	1区	SK15	土師器	高杯		(10.2)	9.5		黄黄	50		
6	19	1区	SK15	土師器	高杯		(8.0)			にぶい黄	20		
6	20	1区	SK15	土師器	高杯		(8.0)	10.0		にぶい黄	10		
6	21	1区	SK15	土師器	蓋	7.4	(4.7)			淡赤	20		
6	22	1区	SK15	土師器	蓋	14.0	(4.5)			にぶい黄	5		
6	23	1区	SK15	土師器	鉢		(5.8)	12.0		にぶい黄	30		
6	24	1区	SK15	土師器	鉢	19.4	(4.0)	14.8		黄黄	5		
6	25	1区	SK15上層	土師器	鉢		(6.0)		10.0	にぶい黄	10		
6	26	1区	SK15	土師器	鉢		(1.8)		10.8	にぶい黄	5		
6	27	1区	SK15	土師器	蓋	19.6	29.2	17.5	27.0	13.9	にぶい黄	60	
6	28	1区	SK15	土師器	蓋	17.7	(29.5)	14.8	21.0	9.6	黄黄	80	外面露付着
6	29	1区	SK15	土師器	蓋	21.1	(26.9)	19.6	24.0		にぶい黄	50	
6	30	1区	SK15	土師器	蓋	21.0	(36.0)	20.2	21.6		黄黄	20	外面露付着
6	31	1区	SK15	土師器	蓋	19.8	(14.0)	17.7	26.9		にぶい黄	20	
6	32	1区	SK15	土師器	蓋	21.0	(9.0)	18.9		黄	30		
6	33	1区	SK15上層	土師器	蓋		(11.8)		4.4	にぶい黄	20		
6	34	1区	SK15上層	土師器	蓋	21.0	(17.0)			黄	20		
6	35	1区	SK15上層	土師器	蓋		(7.0)			にぶい黄	5		
6	36	1区	SK15上層	土師器	蓋		(7.7)			にぶい黄	5		
6	37	1区	SK15	土師器	把手付鉢	20.6	23.0	19.0	25.9	9.4	黄黄	80	
6	38	1区	SK03	灰釉陶器	甗	13.0	4.0			5.8	灰白	70	
6	39	2区		灰釉陶器	甗	12.8	4.9			6.4	黄灰	60	
6	40	3区		灰釉陶器	甗		(3.0)			6.0	灰白	20	
6	41	2区		灰釉陶器	甗	14.9	(4.9)				灰白	20	
6	42	2区		灰釉陶器	小甗		(1.6)			4.8	灰白	20	重丸痕
6	43	1区	SK03	灰釉陶器	甗		(1.9)			6.4	灰白	20	重丸痕
6	44	1区	南半	灰釉陶器	甗		(2.0)			6.8	灰白	20	
6	45	2区		灰釉陶器	甗		(2.1)			6.3	灰白	30	
6	46	2区		山系陶	甗		(2.7)			7.4	灰白	60	
6	47	2区		山系陶	甗		(3.8)			7.2	灰白	20	重丸痕、高台端部剥落痕
6	48	2区		山系陶	甗		(2.8)			7.0	灰白	50	
6	49	2区		山系陶	甗		(2.1)			5.0	灰白	30	
6	50	2区		山系陶	子持小甗		(1.9)			5.0	灰白	20	

【参考文献】

- 鈴木敏則 1998 「古墳時代土器編年の概要」『梶子北遺跡 遺物編（本文）』財団法人浜松市文化協会
鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
鈴木敏則 2005 「出土須恵器について」『東若林遺跡』財団法人浜松市文化振興財団
中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真福社
松井一明 1989 「富口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」
『静岡県下の窯業遺跡』静岡県教育委員会
松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
松井一明 1995 「古墳時代後半土器編年」『坂尻遺跡 - 遺物・総括編 - 』袋井市教育委員会

【発掘調査報告書】

- 菊川市教育委員会 2006 『皿山古窯跡群 - 第7次調査 - 』
菊川市教育委員会 2016 『宮ノ西遺跡発掘調査報告書 第4次調査』
菊川町教育委員会 1990 『四ツ枝遺跡』
菊川町教育委員会 1996 『小川端Ⅱ遺跡』
菊川町教育委員会 1999 『藤谷横穴C群』
菊川町教育委員会 2000 『御領所遺跡』
菊川町教育委員会 2002 『宮ノ西遺跡』
菊川町教育委員会 2003 『宮ノ西遺跡』
菊川町教育委員会 2004 『加茂神社遺跡 - 第2次調査 - 』
静岡県教育委員会 1989 『静岡県の窯業遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『井通遺跡 本文編1』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『井通遺跡 本文編2』
鳥田市教育委員会 2018 『旗指古窯第4-II地点 上反方遺跡』
浜松市教育委員会 2004 『有玉古窯』
浜松市文化協会 1998 『梶子北遺跡 遺物編（本文）』
浜松市文化協会 2004 『坊ヶ跡遺跡』
浜松市文化振興財団 2005 『東若林遺跡』
袋井市教育委員会 1985 『坂尻遺跡 - 序文・古墳時代編 - 』
袋井市教育委員会 1995 『坂尻遺跡 - 遺物・総括編 - 』

第4章 まとめ

今回の調査範囲は、遺跡の北東縁部にあたり、東側には菊川の支流である小出川が南へと流れている。現地表面は平坦な水田面であったが、発掘調査によって、西側の丘陵を背にした微高地から東の小出川に向かって緩やかに下がる地形であったことが把握できた。発見された遺構や遺物も決して多いわけではない。微高地上を中心に集落跡があり、今回の調査範囲は河川に面した縁部にあたりと評価することができる。

発見された遺構・遺物は、古墳時代（後期）と平安～鎌倉時代に大別することができる。

(1) 古墳時代

調査範囲の西部において、埴地遺構（SX15）が検出され、比較的多くの土器が出土している。上層では破片の出土で占められるのに対して、下層では比較的残りの良い個体が点在して出土している。ただし、完形品に復元できるものはなく、使用できなくなった土器を廃棄したものと評価することができる。出土土器の時期は、上層・下層の違いに関らず古墳時代後期後半（6世紀後半）を主体とする。また、土師器の甕や甔、高坏が多く、須恵器は少ない。墓域に供献される組成とは異なり、居住生活で用いていたものと評価したい。

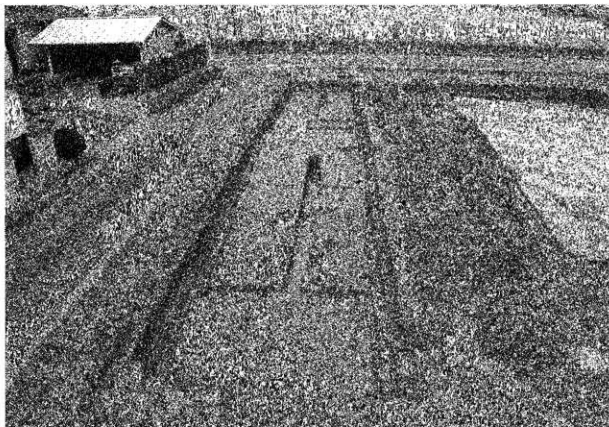
埴地遺構より東の小出川側では、この時期の遺構・遺物が全く認められなかった。したがって、古墳時代後期後半においては、調査範囲より西に広がる微高地上に集落が立地しており、その東縁、小出川へと下る縁にこの埴地遺構が位置し、集落で用いていた土器などを投棄していた可能性を評価したい。一方、微高地のさらに西の丘陵地には横穴墓が存在する。この横穴墓の詳細は不明であるが、菊川流域を含む東遠江には横穴墓が集中して分布しており、古墳時代後期前半に出現して後期後半から終末期にかけて多く造られたことが判明している。新来の墓制である横穴墓の普及と関連して、それまで居住域として選ばれなかった狭い谷平野の奥まった微高地上に、新たな集落が営まれた可能性を考えることができる。

(2) 平安～鎌倉時代

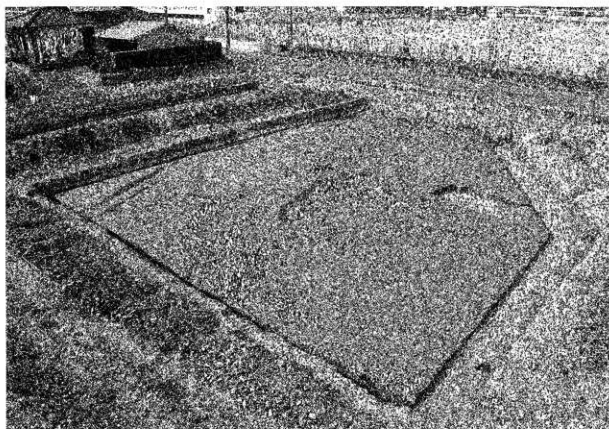
調査範囲の西寄りにおいて、平面方形の堅穴状遺構（SX03、SX10）が検出された。これらには柱穴がなく、甕を伴っているかも不明であるため、住居跡であるかは判断し難い。しかし、微高地上に集落の営みがあったことを示すものと評価したい。一方、東側の斜面地においても包含層から土器が出土し、溝状遺構や土坑が検出されたが、遺構・遺物の分布は斜面地を下ると少なくなる。したがって、集落の周縁域にあたりと評価したい。

集落跡の実態については、今回の調査範囲よりも西側の状況を把握する必要がある。過去に発掘調査が実施された部分もあり、溝状遺構や小穴等が発見されている。しかし、その成果を明らかにするには整理、分析作業が必要であることから、本書では今後の課題としたい。

写真図版



1 1区全景(南から) 北半は上面、南半はSX15下層遺物出土状況

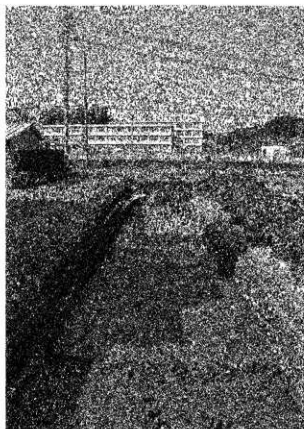


2 2区全景(南東から)

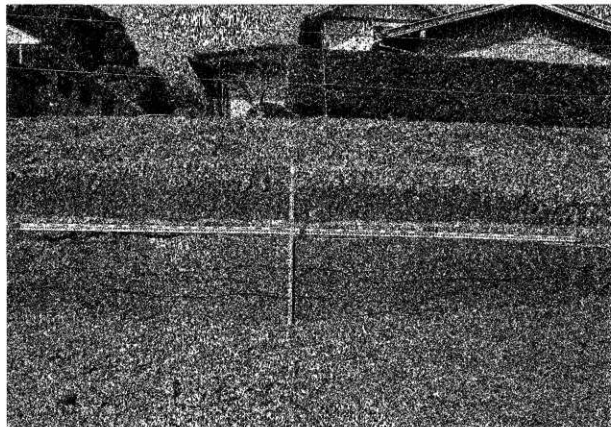
図版2



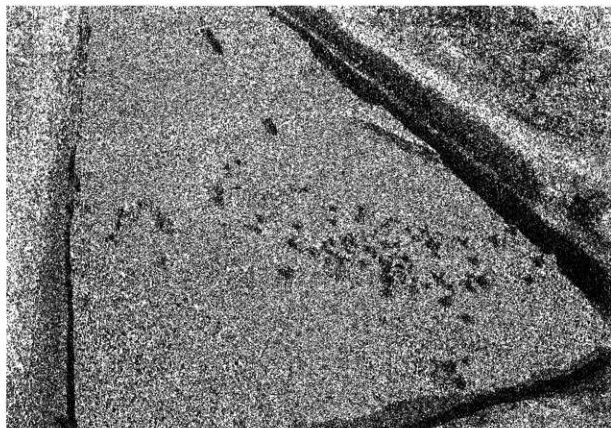
1 3区全景（東から）



2 1区調査終了状況（南から）



3 1区西壁SX15北部土層断面（東から）



1 SX15上層遺物出土状況(南から)

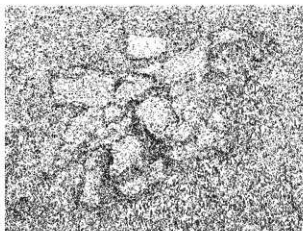


2 SX15遺物(37)出土状況(北西から)

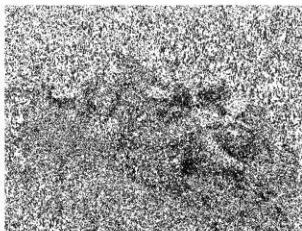


3 SX15下層遺物出土状況(南東から)

図版 4



1 SX15下層遺物 (27) 出土状況 (南西から)



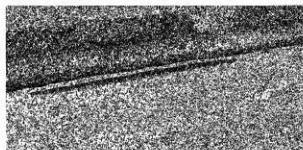
2 SX15下層遺物 (18・37) 出土状況 (南東から)



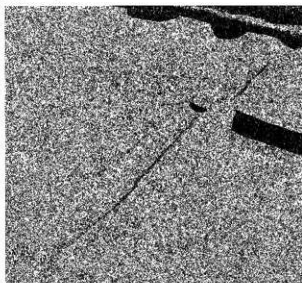
3 SX03 (北西から)



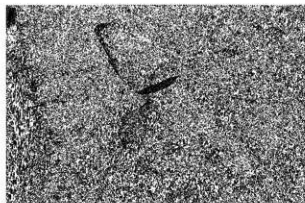
4 SX03遺物出土状況 (西から)



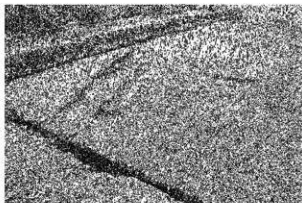
5 SX10 (南東から)



6 SD02 (南西から)



1 SD01 (北東から)



2 SD07, SD12, SD08 (南東から)



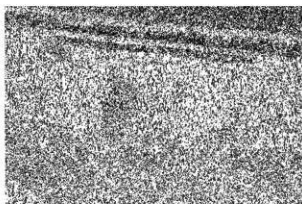
3 SD09 (南東から)



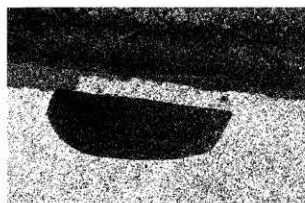
4 SD16 (東から)



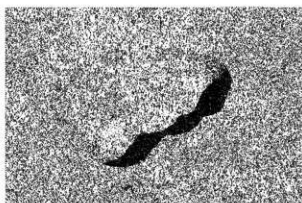
5 SK04 (北西から)



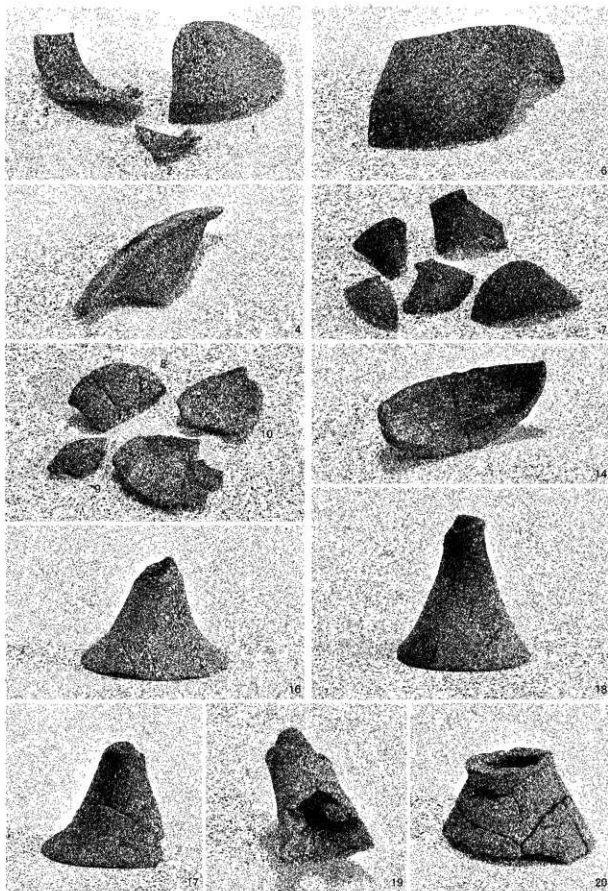
6 SK14 (東から)



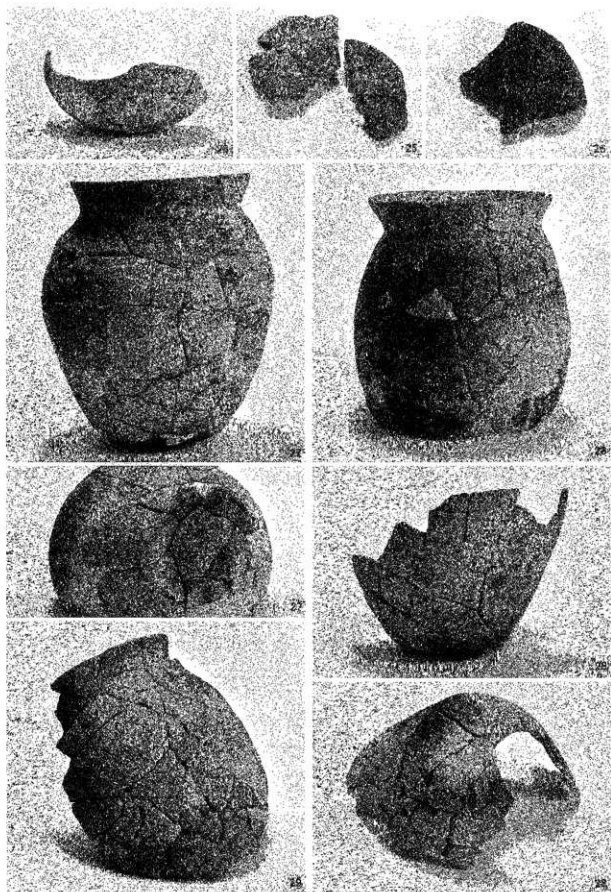
7 SK13 (北西から)



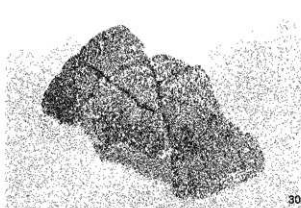
8 SP11a-b (南から)



出土遺物 1



出土遺物 2



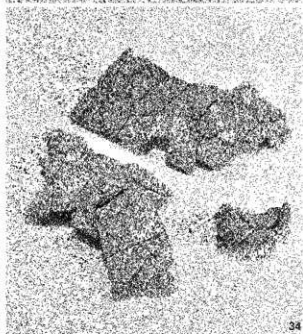
30



26



31



34

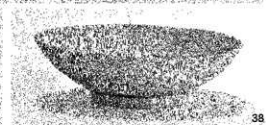


36

35



37



38



39



50

報 告 書 抄 録

ふりがな		しもだいせきだいななじはつくつちょうさほうこくしょ						
書名		下田遺跡第7次発掘調査報告書						
副書名		(六郷地区センター建設に伴う発掘調査)						
巻次								
シリーズ名		菊川市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第22集						
編著者名		丸杉俊一郎(編集)、田村隆太郎						
編集機関		菊川市教育委員会						
所在地		〒437-1514 静岡県菊川市下平川6225				TEL0537-73-1114		
発行年月日		2020年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
しもだいせき 下田遺跡	静岡県 菊川市 ほんごよあさしもだ 本所字下田	22224	96	34度 44分 41秒	138度 5分 41秒	20180129 ～ 20180320	500㎡	六郷地区セン ター建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
しもだいせき 下田遺跡	集落跡	古墳時代		窪地遺構		土師器、須恵器		
		平安～鎌倉時代		堅穴状遺構、溝 状遺構、土坑、 小穴		灰釉陶器、山茶碗		

調査地点は遺跡の北東縁部にあたり、東側には菊川の支流である小出川が南流する。調査では東に緩やかに下がる地形が検出され、平安～鎌倉時代の陶器が出土し、堅穴状遺構や溝状遺構が発見された。集落の周縁部にあたるものと評価できる。また、斜面上方(西寄り)では古墳時代後期後半の窪地遺構が検出され、土器が出土した。集落の周縁の窪地に投棄したものと評価できる。周辺の丘陵には横穴群が分布しており、その普及期に関連する集落跡として注目される。

菊川市埋蔵文化財調査報告書 第22集
下田遺跡第7次発掘調査報告書
(六郷地区センター建設に伴う発掘調査)

編集・発行	静岡県菊川市下平川6225 静岡県菊川市教育委員会 TEL 0537-73-1114
印刷	静岡県菊川市堀之内1252番地 斎藤写植 TEL 0537-35-2847
発行年月日	令和2年3月31日